
雪風とゼロと不幸と弓兵と…

流人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪風とゼロと不幸と弓兵と…

【Nコード】

N0090H

【作者名】

流人

【あらすじ】

この小説は「ゼロの使い魔」と「とある魔術の禁書目録」、「Fate」を題材にして書かれています。原作とは性格が変わって行くかもしれないのでご了承下さい。さらにこの小説は作者の思いつきと遊び心で書かれています。ちなみに弓兵さんと上条当麻は最強ですまさにチート…まあ処女作なので多めに見てやって下さいな。

P r o l o g u e 0 1 : : 不幸な少年（前書き）

とりあえず上条 s i d e G O — ! !

Prologue 01..不幸な少年

「待ちやがれ————！！！！！！」

「あーもう、ちくしょう、不幸だ、不幸すぎるー！！！！！！」

ここは学園都市、東京の3分の1程の広さがあり多くの学生が学業に励んでいる。

しかし、ここに住んでいる学生はただの学生ではない、全員ではないが多くの学生が何かしらの超常的な能力を有している者達である。

例えば、それは電気うなぎの様に発電能力が有ったり、物体を瞬間的に移動または自身を瞬間的に別の場所へ移動させる能力である。

これらの能力を目覚めさせるには色々とあるのだが面倒なのでそこらへんは省かせて頂く。

そんな学園都市の一角で少年が数人の少年に追いかけてい
る。

追われている少年はいたって普通の高校生でまあ平凡な少年である。そんな少年を追っているのは所謂不良と呼ばれる様な人たちである。

「そろそろ諦めろっつーの!! いい加減しつこいぞてめえら!!」

「ああー!?! てめえが逃げるのを諦めやがれ!!!」

そんなこんなでかれこれ2時間ほど彼らは追いかけてここに興じている。

「何でこんなことになったんだー！！！！」

そもその原因は2時間ほど前、少年が飲み終わったジュースの缶をそこらへんにポイ捨てしたのが不味かった。

しかし、そのポイ捨てした缶が近くを歩いていた不良少年の足元へ転がっていき、その缶が原因で転んだ少年が近くにあったゴミ箱に頭から突っ込み、さらに散らばったゴミが少年達に降りかかるなど誰が思おうか？

まあ偶然だと少年が言おうが不良少年達には関係が無く、ゴミだらけにされた事をうらむ対象は少年しか居なく結果として、今回の追いかっつこが始まったのである。

ここまで不幸な少年はやはり普通の少年であるはずが無い、3ヶ月ほどの間に何度も何度も三途の川を渡りそうになり、普通の人間ならば一万回死んでもお釣りがくるような相手と喧嘩したり、鬼ごっこしていながらしぶとく生き残っているのである。

町の不良少年達との追いかっつこ程度だったら何とも無いのであるが、そこは不幸な少年である。逃げている途中に猫や犬の尻尾を踏んだり、なぜかカラスが攻撃してきたりと不良少年達から逃げるのを防がんとするばかりに不幸なことが訪れるのである。

「はあー、やっと撒いたか…」

そうこうしている内に更に1時間が経過しやっと不良たちを撒いてアパートへ帰ると

「うううっ！！！！！！遅い！！！！遅いよ！！！！お腹すいたー！！！！」

ガブツ!!

玄関先で待っていた修道服姿の少女が少年の頭へ噛み付いた

「痛ってええー！ー！ー！ー！！！！痛い！マジで痛いから咬まないで！！！！」

ガブツガブツ！！！！

「私の頭は食べられませんから放して下さい！！！！今すぐご飯を用意しますから！！！！」

彼女の名は禁書目録^{インデックス}。インデックスは少年の家に居候をしているシスターで世界に散らばる十万三千冊の魔道書を記憶している言わば移動型図書館である。

「インデックスはお腹すいて死にそうなんだよ！！！！！！」

「分かったから！！これでも食べて下さい！！！！だから今は頭を放して！！！！つか、かじりながら喋るとか訳の解らない無駄な技造らないで！！！！！！」

少年はそういつて鞆の中に入れてあったお菓子と昼に買ってそのまま食べなかったパンを投げた。

「ご飯ー！ー！ー！！！！！！」

インデックスが飛びつき食べ始める。それを見た少年はすぐさま次の食事を用意するためキッチンへ駆け込んだ。

しかし、少年が飛び込んだキッチンで見た物は大きな鏡のようだった。

「なんだこれ???」

少年は恐る恐る近づいて左手を差し出し触ろうとした、すると左手の指先が触れた瞬間。

スウーッ

「?!?! なっ何だ?! すっ吸い込まれる!!!!!! う、うわああ
あ—————!!!!!!」

少年は鏡に吸い込まれ鏡は消えた。

「どうしたの? あれ? 何処行っただの????」

インデックスがキッチンに来たがそこには誰も居なかった…

P r o l o g u e 0 1 : 不幸な少年（後書き）

プロローグしか載せていないですが、もし感想や問題点、改善点、誤字、脱字がございましたらご連絡下さい。

P r o l o g u e 0 2 : : 悲しみと喜びの弓兵 (前書き)

弓兵 s i d e G O — ! !

P r o l o g u e 0 2 : 悲しみと喜びの弓兵

一人の男が傷だらけで丘の上に立っている。

男の周りには多くの武具が刺さっている。

男は最初泣いていた。

守ろうとしても守れなかったから。

十を守るために一を切り捨ててしまったから。

それでも一時は満足していた。

しかし、男はやはり全てを救いたかった。
だから最後に無理をしてしまった。

「もう終わりか…」

男は今は笑っていた。

男はもうじき死ぬだろう…

自分が救った者達の裏切りを受け…

無理をして全てを救ってしまったが為に…

それでも男は笑っていた。

最後に全てを救うことが出来たから。

死ぬ前の走馬灯だろうか？

男の脳裏には懐かしい思い出が流れていた。

高校の頃に出会った仲間達との思い出が…

今はもう会えないが皆、大切な人たちである。

「ああ、懐かしい…」

住んでいた町で行われたあの忌まわしき戦争の記憶さえ愛おしく思える。

「もう会えない、だがこれで満足だ。」

男は笑顔である。

「ただ、最後にもう一度会いたかったな。」

「セイバー」

男は死に絶えた…

はずである。

あれ？死んだよね？

じゃあ何でまだ生きてるんだ？

「なぜだ？」

「なぜ私はまだ生きている?!」

「そして、ここは何処だ？」

男が居たのは何も無い空間である？
上下があるのかも、重力があるのかも、光があるのかもわからない。
ただ自分の姿だけが見える。

「もしかして、ここが英霊の座か？」

「しかし、なぜだ？私は満足して死んだ、世界と契約などしてはいないぞ？」

男が困惑していると声が聞こえた。

『ここは英霊の座ではない。』

声は老人のようであった。

「ならば何処だ？ 私は死んだのではないのか？」

『イヤ、おぬしは正確にはまだ死んではないだがもうじき死ぬじやろう。そして現状でおぬしを治療しても世界がそれを許さんじやろ。しかし、弟子に泣き付かれたのじや。』

「弟子？ なるほどあなたは…」

『ああ、おぬしを救って欲しいとな。』

「私を救う？ どうやって？」

「私はもうすぐ死ぬのだぞ？」

「ならばどうやって？」

『おぬしの治療を許さんのはわしらの住む世界じや。だが、別の世界ならばどうじや？』

「別の世界？ 異世界にでも送ろうというのか？ 出来るのか？」

『出来る。まあ何を指して異世界というかは確かではないがな。しかし、おぬしの身に何が起こるは解らん。ただ、このまま死ぬよりは良いと思うが？』

「確かに…」

『どうする?』

「わかった、お願いしよう。」

『よし、ではまず治療をしよう。おぬしに大量の魔力があればアヴアロンでさえも生成できよう?』

「恐らく、短時間ならば」

『ならばわしが擬似的にパスを繋ぎ魔力を送るからそれで生成しなされ。さすれば死にますまい。』

老人はそういうと男に向かって魔力を送った。

そして、男はその魔力を使い光輝く鞘を生成した。その鞘を男が持った瞬間から体中にあつた傷が瞬く間にふさがっていった。傷を全てふさぎ終えた辺りで鞘は消え去った。

男は魔力を大量に失った疲労感から全身から汗を流しながら片ひざをついたが老人が魔力を更に送ることで直ぐに持ち直した。

『準備は良いな? では道を開くぞ。』

老人がそう言うとき大きな鏡のような物が現れた。

男は何も言わずにそれをくぐろうとする。

『そうじゃ、弟子から伝言じゃ。【自分の幸せをそろそろ求めても良いのでは?】だそうじゃ。』

（自分の幸せか：私に許されるのか？）

「まあ考えておくさ。」

そういうと男は笑いながら鏡の中へ消えていった。

『あの様子ならば大丈夫そうじゃな。頑張れよ若いの。』

老人は笑いながらそうつぶやいた。

P r o l o g u e 0 2 : 悲しみと喜びの弓兵（後書き）

1話目に次2話目も感想等お待ちしております。感想以外にもこのキャラはこんな喋り方をしないなどありましたら教えて下さい。1話と2話については訂正いたします。それと老人は勝手に推察してください。

※ホッとショット様のご指摘により少々変更しました。 09／5／
28

P r o l o g u e 0 3 :: 雪風とゼロ (前書き)

二話目です。やっとルイズとタバサ登場

Prologue 03：雪風とゼロ

草原の様に広い場所に一人の男と複数の子供達が集まっている。皆は少し緊張している様子で佇んでいる。

「それでは皆さん！！二年生になった者達にとって最初の試練でもある使い魔召喚の儀式を始めます。」

「「「はい！！！！」」」

皆は緊張しているが、それと共に期待もしている。

これらが始まる召喚で一生を共にする大切な相棒を召喚するためである。

ただし、この召喚が成功しなければ二年生にはなれない。

その為、緊張する者もやはりいる。例えば桃色の髪をした少女は目を閉じ意識を召喚に集中している様子である。

「ちょっと、あなたの番よ！早く召喚してよ！！」

集中力を高めている間に少女の順番が回ってきた様だ。

「分かってるわ。」

彼女は杖を持って皆の前に立ち召喚サモン・サーバントの儀式を始めた。
しかし…

ボンッ！！

…小さく爆発が起こり、何も現れない…

ワーツハハハハ…！！！！

周囲に爆笑が起こる。

「ツツだから、早くしてってツツ！！」

笑いながら先ほど催促した赤い髪の少女が再度促す。

「分かってるわよっ！！！！！！」

桃色の髪の少女が顔を真っ赤にしながら怒鳴る。

そして、再度召喚の儀式を始めた。

「私の僕^{しもべ}となるものよ！私の呼びかけに答えなさい！！！！！！」

少女は力の限り叫んだ、周りはシンツツと静まりかえる。
しかし…

…やはり、何も起こらない…

…と思ったら。

大気に存在するマナが少女の目の前に集まっていく。

ドカーーーーン!!!!!!

大爆発が起き、煙で周囲が見えなくなる。

「ケホツケホツ! どーなったの??」

しばらくして煙が晴れるとそこには、黒いボディースーツに赤い布をあしらった服を着た少年が居た。

「?? ここは何処だ??」

少年が困惑していると周囲が騒がしく鳴り出した。

「オイ!! そこの平民なんぞ連れてきてどうするつもりだよ!!」

「そうだ! そうだ! 召喚が上手くいかないからって平民を連れて来てんじゃないぜ!」

そう数人の少年が騒いだ。

「ミスタ・コルベールもう一度やらせて下さい!! こんな平民私は召喚していません!!」

「いけません、サモンサーバントは神聖な儀式です。それを二度も行うなどあってはなりません。」

「しかしっ!!」

「駄目な物は駄目です。早く契約を済ませてください。」

コントラクト・サーバント

桃色の少女は男に訴えたが、コルベールと呼ばれた男は聞く耳を持たなかった。

少女はしぶしぶ赤い服を着た少年の元へ歩み寄った。

「平民に貴族がこんなことをするなんて、ありえないんだから感謝しなさいよ。」

「いったい何をするつもりだ？」

少年は警戒しつつ尋ねた。

「うるさい！！あんたは黙ってなさい！！」

我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ。」

そう唱えると少年に向かいキスをしようとしてきた。

突然のそれを少年は避けようとするが体が思うように動かない。

そして、キスをされた瞬間少年の左右の手に激痛が走る。

「つつ！！！！！！」

痛みが無くなって少年が手を見るとそこには古代ルーン文字のようなモノが刻まれていた。

（何だ先ほどの痛みと、この文字は？？）

「おや？見たことの無いルーンですね？？少々写しを取らせて頂いて宜しいですか？」

「あ？ああ。」

先の男が歩み寄ってきてそのルーン見てつぶやき少年は戸惑いつつもそれに答えた。

そして、現状を把握するために周囲を見渡すとそこはどこかの学園のようだった。

「何処だここは？すまないが説明して頂けないか？」

少年は男にそう尋ねた。隣では先ほどルイズと名乗った桃色の髪をした少女がなにやら騒いでいるがこの際気にしないようにしよう。

「おお、そうでしたね。ですが、すみませんあと一人サモン・サーバントを済ませていない者が居るのでそれが終わってから出よいですか？」

「ああ、それくらいなら待とう。」

「では、最後の人お願いします。」

男がそういうと青い髪の少女が前に出た。何処を見ているのかが良く分からない少女である。

そして、杖を掲げ集中して召喚の儀式に入る。

「…来て。」

少女がそうつぶやいた瞬間

ピカッ！！！！！

周囲に光が走った。

そして、光が収まるとそこには中肉中背の学生服を着たあの不幸な少年がへたり込んでいた。

「な、何だここは？？オレは誰だ？？」

少年はパニック状態のようだ…そんな、少年の様子は…哀れだ…そんな少年に

「ボソボソッ」

チュッ♪

…青い髪の少女はキスをした。何気に少女の顔は赤い…

「は？え？何？何この状況？」

少年は現状の理解が追いついていない。

その瞬間…

「うぐっ！！！！！！！」

少年の左腕全体と左胸の心臓付近に激痛が走る。

「ぐっがあああ！！！！！！」

少年が痛みに耐えかねて叫んでいた。

しばらくすると痛みが嘘の様に引いていった。

脂汗を流しつつも左腕を見ると揺らめく炎が走っているかのような赤い文様が刻まれていた。

更にシャツの隙間から左胸も見ると丁度、心臓の真上に見たことも無い文字で何かが刻まれていた。

「何だこれ？」

「大丈夫…？」

「ん？ ああ大丈夫だ。」

声をかけられ顔を上げるとそこには結構近い位置に先ほどキスしてきた少女の顔があった。

（ヤバイ、さっきの事もあるし。何よりこの子カワイイ／／／／／）

少年は純情であった。ちなみに少年よ何か忘れていないか？

（／／／／／…っと恥ずかしがってる場合じゃない、ここは何処か聞かなきゃ。）

少年は思い出したようである。

「あなたの名前は？」

「え？あ、そういえばまだ名前言ってなかったな、俺の名前は上条^{かみじょう}当麻^{とうま}。君の名前は？」

「私はタバサ。」

「なあ、ここは何処だ？」

「ここはトリステインにある魔法学院。」

「は？トリステイン？魔法学院？なんだそりゃ？？？？」

当麻は混乱していた。

「少年よ、混乱するのは分かるがまずは落ち着きたまえ。常に冷静でなくてはいけない。把握できる者も出来なくなるぞ？」

先に召喚された少年が話しかけてきた。

P r o l o g u e 0 3 :: 雪風とゼロ (後書き)

次の話から少し短くなっています。

Episode 01.. 出会い

「まずは深呼吸でもして落ち着きたまえ。」

「ヒッヒッフゝ、ヒッヒッフゝ、ヒッヒッ…」

ペシッ！

「それはラマーズ法だ、少年よ流石にベタ過ぎるぞ？」

「確かに…でもまあ少しは落ち着いてきたかな？」

当麻と少年はベタなやり取りをしたが、そのやり取りのおかげで当麻は落ち着きを取り戻せたようだ。

「そうか、それは良かった。それからこの世界の事だが、少年よ私もこの世界についての説明を後ほど受ける、その時までには全てをしっかりと把握できるように冷静になっておけよ？」

「分かった。てか、あんたも説明を受ける？ってことはあんたも召喚されたのか？」

「ふむ、そうであったな。私も少年と同じく召喚され使い魔となった者だ。」

（もしかして、同じ世界から？）

「じゃあ学園都市って知ってるか？日本にある有名な町なんだけど？」

「学園都市は知らぬが私も日本に住んでいたことがある。」

「マジか?!じゃあ地球出身でいいんだな？」

「ああ、地球出身だ。しかし詳しい話は後だ、まずこの世界の説明を聞こう。」

「確かに、所でオレの腕を見てなにやらスケッチをしているおっさんは誰だ？」

当麻が指をさすとそこにはなにやら真剣な表情でスケッチしている男が居た。

「おっさん?!わ、私はまだ若い!!おっさんではない!!!!」

「あ、ああ、すみません。では何と呼べば良いですか？」

おっさんと言う単語に反応した、すごい剣幕で詰め寄ってきた男に対し、当麻は若干引きながら尋ねた。

「そういえば自己紹介をしていませんでしたな。
私はコルベール、この学校で教師をしている者です。」

「ではコルベール先生と呼ばせて頂ます。」

「私もそう呼ばせて頂こう。」

「で、君達は何と呼べば良いのかな？」

「そういえばまだあんたの名前聞いてないな？」

「私も少年の名前を聞いていないぞ？」

互いに顔を見合わせながら言った。

「では、私の名前は衛宮^{えみや}士郎^{しろう}、士郎と呼んでくれ。」

「次はオレだな、俺の名前は上条当麻、当麻と呼んでくれ。
それとさっきから気になっていたがオレは少年じゃねえ、それに、
あんたもオレと同じくらいだろ？」

何気に当麻は少年と呼ばれていた事にムカついていた。

「ああ、すまなかったな。しかし、私は君よりも年上だ。
何歳かまでは忘れたが、確か20代の後半だった気がする。」

「はあ？嘘だろ？だってまだかなり若いぞ？」

（若い？そんなはずは無い、私の姿はかつてのアーチャーとほぼ同

じになっていたはずだ。髪だって白く…?!」

「髪の色が元に戻っている？なぜだ白になっていたはずだが？それに肌の色が元に戻っている！何が起こったのだ？」

落ち着いている振りをしているも士郎もかなり混乱していて変化に気が付いていなかったようだ：

（もしかして、これが世界を渡った副作用か？他にはどんな変化が…?!?!?!）

士郎は体の調子を探ってみて更に混乱した。

（なんだこれは?!魔術回路が100本だと？ここに来る前には底をつきかけていた体内の魔力が果てしない程増大している?!）

まあ混乱するのも仕方が無いかも知れない、魔術回路が4倍に増え、魔力もは無限に等しい程に増加したのだから。

（な、なんだ？一体？士郎はどうしたんだ？）

当麻は呆然としていた士郎が若いと聞いた途端、髪が黒いだの肌が元に戻ったのだと叫んで固まってしまったのだから。

「オ、オイ、大丈夫か？」

当麻は恐る恐る声をかけてみた。

「あ、ああ大丈夫だ。体全体が若返っていたので少し驚いただけだ。」

（あれの何処が少しか…）

などと当麻は言おうと思ったが士郎が否定してきてめんどくさそうなので言うのを止めた。

「ちょっとあんた達！！ご主人様をほったらかしておいてどうゆうつもり！！！！」

いつまで経っても話が終らないので痺れを切らしたルイズが声を掛けて来た。

「ああ、すまないな。ちょっと話がはずんでしまった。」

「なあ、誰だ？この偉そうなガキは？」

「なっ！！偉そうなガキですって？！！？！！？私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！侯爵家の人間よ？！平民の使い魔風情がなんて口を！！！」

「まあまあルイズ、当麻もこちらの流儀を知らないだけだ、悪気は無い許してやってくれ。ほら当麻も謝れ。」

「うう、すみませんでした。」

当麻は何と無くあのビリビリ少女を思い出し怯えながら謝った。

「わ、分かればイイのよ。」

当麻が何故か怯えながら謝ってきたのでルイズは困惑しながら言った。

「時間…」

そこへ、今まで座って本を読んでいたタバサが声を掛けて来た。

「ああタバサ、時間って？」

「授業の終わり…」

「そういえば、もうそろそろね。」

とルイズも同意したところに

「では皆さん授業はここまでと致します。教室へ戻って下さい。ただし、ミス・ヴァリエールとミス・タバサ、それに両名の使い魔の方々は残って下さい。では、解散。」

そう言いコルベールは授業を終えた。

Episode 01.. 出会い (後書き)

話が長くなりすぎた…

ほぼ自己紹介で終わってしまった。

次の話はもっとペースを上げれると嬉しいのだが…

※以下の事を修正しました。

士郎の髪の色

ご指摘くださった、ルナ様、ホッとショット様

どうもありがとうございます。

今後間違いなどございましたらどうぞご指摘下さい。

E p i s o d e 0 2 :: 説明－1（前書き）

ああー短いのにかなり時間がかかったー！！！！

説明はやはりめんどくさいな…

でも、しっかりつくって置かないと後々が面倒だし…
しかも分かれちゃったし…

まあとりあえず。

読んでくださっている皆様本当に遅くなりました。
これからも頑張りますのでお待ち頂けたら幸いです。

Episode 02..説明-1

そして、皆が帰る中、タバサ、当麻、ルイズ、士郎が残った。

「さて、まずは何かからお話しましょう？」

皆が教室へ戻った頃合を見計らってコルベールが話し始めた。

「では、まず此処の説明をお願いします。」

「あ、オレもそれが一番聞きたい。」

「分かりました。この国はトリステイン王国、でこの場所はトリステイン魔法学院、世界中の名門貴族の子息等が魔法を勉強するために通う学校です。」

「そうか…では、魔法とは？」

「は？ あんた魔法も知らないなんて何処の田舎から来たのよ？」

士郎が魔法について尋ねると、それまで黙っていたルイズが口を挟んできた。

「魔術ならば知っている、しかし、魔法など私がいたところには無かったのだよ。」

「オレが居た所にも魔法は無かったなく、魔術や超能力はあったけどなく。」

「は？超能力って何よ？？そんな魔法聞いたこと無いわよ？」

ルイズは超能力の事を魔法の一種だと思っているようだ。

「いや、魔法じゃないって…。超能力ってのはだな…」

「待った、私も超能力については少しかり気になるが今は魔法についての説明を聞こう。」

当麻がルイズに超能力の説明をしようとした所に士郎が待ったをかけた。

「ああ…：そういえば忘れてたな…：すまん話を続けてくれ。」

「分かりました。では、魔法についてでしたね？」

コルベールは少し超能力の事も気になったが後で聞くことにしよう
と思い。話を戻した。

「魔法とは、自らの精神力を使用し世界に干渉して様々な現象を引き起こす事を言います。」

そして、使用者の属性を足せる数によって使える魔法も様々な変化します。

例えば火のドットクラスは、『火』が一つでファイヤーボール位しか使えませんが、トライアングルクラスになると更に『火、風』を足してファイヤーストームを使えるようになります。

それから属性ですが『火、水、風、土』の四種類と失われた属性である『虚無』となっています。」

「そのドットやトライアングルってのは何ですか？」

「ドットやトライアングルとは属性を足せる数の事です。一つならばドット、二つならばライン、三つならばトライアングル、四つならスクエアと言う風になっています。」

「その上は無いのか？」

「トライアングル以上の王族が2名揃って初めて使えるヘキサゴンマジックと言うのもありますがそれ以外ではスクエアが最高位です。」

「そうか…」

（この世界の魔法は属性を加算して使用するのか、そしてこの世界での精神力とは私達でいう魔力のような物か…）

「他に何か質問はございますか。」

「私は特に無い。」

「オレも無い…」

「そうですか、では私はこれから私用がある為失礼いたします。お二人の話もお聞きしたいのですが残念です。

また、機会がありましたらお聞かせ下さい。」

「ああ、機会があればまた。」

「そうそう、次の時間は使い魔とのコミュニケーションを取る授業をする予定だったので、

このままあなた方は話をされていて宜しいですよ。どの道今日はもう他に授業もありませんし。」

「分かりました。」

「分かった。」

…コクッ

「分かったぜ、ありがとな先生」

ルイズ、士郎、タバサ、当麻は各々答えた。

Episode 02：説明－1（後書き）

誤字脱字などございましたら、どうぞご連絡下さい。

※追伸

作者の気分によりルイズとタバサ、士郎の性格をホンの少しだけ変更します。

嘘言いました。タバサとルイズはもしかすると少しじゃないかもしれないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0090h/>

雪風とゼロと不幸と弓兵と…

2010年10月11日04時12分発行